

百人一首を書きましよう。

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに

焼くや藻塩の身もこがれつつ

【現代語訳】

来ない人を待つ、その松帆まつほの浦の夕なぎの時に焼く藻塩もしおのように、わが身は恋心に焦がれている。

権中納言定家

風そよぐ櫛の小川の夕暮は

御襖ぞ夏のしるしなりける

【現代語訳】

風が櫛なの葉をそよがせている、このならの小川の夕暮れはまるで秋のようで、ただ襖みそぎの行われていることだけが夏であることのしるしであるなあ。

従二位家隆

人も愛し人も恨めしあぢきなく

世を思ふゆゑにももの思ふ身は

【現代語訳】

人が愛おしくも、恨めしくも思う。この世を面白くないと思っている為に、さまざまな物思いをするこの私は。

後鳥羽院

百敷や古き軒端のしのぶにも

なほ余りある昔なりけり

【現代語訳】

宮中みやちゆうの古い軒端のひばに忍ぶ草しのぶを見るにつけても、いくら忍んでも忍び尽くせないのは昔の御み代よであるなあ。

順徳院